<座談会>

芦高生と自治会活動

（平成元年10月29日）

座談会出席者名

生徒指導課長　**大仁　洋**
生徒指導課長代行　**高木　正皓**
運動部理事　**東原　熙**
文化部理事　**金延　重光**

第31代（昭和53年度）から第41代（昭和63年度）までの会長・副会長・運動部長・文化部長の皆さんに出席していただきました。

第31代（昭和53年度）自治会会長　**山本　健司**
第34代（昭和56年度）自治会副会長
第35代（昭和57年度）自治会会長　**安藤　卓**
第35代（昭和57年度）自治会副会長**永田　達也**
第37代（昭和59年度）自治会副会長**伊塚　正紀**
第37代（昭和59年度）運動部長　**曽我　明美**
第37代（昭和59年度）自治会副会長
第38代（昭和60年度）自治会会長　**山下　龍郎**
第38代（昭和60年度）文化部長　**山下　雪絵**
第39代（昭和61年度）自治会会長　**宮尾　重吉**
第39代（昭和61年度）自治会副会長
第40代（昭和62年度）自治会会長　**灘井　稔**
第39代（昭和61年度）運動部長
第40代（昭和62年度）運動部長　**佐藤　亘**
第40代（昭和62年度）自治会副会長**高須友美恵**
第40代（昭和62年度）文化部長　**水野　誠治**
第41代（昭和63年度）自治会会長　**山本　光一**
第41代（昭和63年度）自治会副会長**鳥本智瑞子**
第41代（昭和63年度）文化部長　**平井　学**

一．記念祭について

春秋分割案とテーマ誕生

高木　記念祭・定期戦というプリント（別表１）がありますが、左頁の記念祭につきましては32回（昭和55年）から41回（平成元年）までの期日とテーマ、会長の氏名と、５日間の日程の内容と主にどんな行事をしたかというのを、記憶を呼び起こしてもらいたいというのでまとめてみました。なお、第33回の※印は記念祭のテーマは「生きる」だったのですが、下の欄外に自治会展で９月18日から23日まで芦屋市民会館で広島の原爆に関する展示を行ったということです。それから、第41回の△印は、今年６月実施ということで、山本光一君が２回記念祭を実施したということです。

なお、今日お見えの山本健司さんの時には、記念祭の時期や期間をどうするかということで、生徒大会まで行われました。わずかの差で、執行部の原案が否決されるということもありました。その辺の話も聞かせて欲しいなと思います。

それでは、記念祭について皆さんの各代の思い出なり、こういう所が目玉だったということなり、あるいは苦労話等自由にお話いただければと思います。どうですか!先輩の山本健司さんから言って頂けますか。

山本健　先輩の方からというので口火を切らせて頂きますが、記念祭自体は９月の終りから10月のあたまにかけて、５日か５日半ぐらいのスケジュールでやったと思います。内容的には、前年までの形式をほとんど継承するという形で行ったのですが、丁度執行部の活動が記念祭を終えると中だるみの状態になりまして、ちょっと身を入れて考えようじゃないかという時期があったと思います。僕らもそういうのがありまして、毎年のような繰り返しに記念祭がなっていることであるし、生徒の興味はクラス展示だとか体育祭だとかにいっているけれど、文化部がメインになるべき公演とか展示とかはもうひとつなので、その所を深く考えてみようということでした。結果的に春秋分離案というのを考えたのですね。その分離案というのは、秋にやるのはクラス展示・

体育祭等クラス中心の行事をしよう。文化部の行事については5月ぐらいにすれば、文化部の立場から見れば、入学早々に大きい行事で、文化部の活動をアピールすることによって新入生にどういう活動をしているのか、単なるガイダンスだけでなく、本当の活動の姿を見てもらえるだろう。秋は秋で、クラスの生徒の興味が移ってきているクラス単位の行事を中心にやればいいのじゃないか。ともすれば分離案というと、受験勉強で3年生が忙しいから分けようとか、そのようにとられがちなんですが、そうではなかった。むしろ僕らの意識としては共通一次が丁度導入された頃ですから、僕らの高校生活が切り取られているという意識だったんですよ。1月に入ってすぐに試験があるから、9月の末から受験票を出したりしてどっぷり受験につかってしまう。我々の高校3年生の生活は3月まであるはずだからという意識でしたから、受験のために秋の記念祭の日程を減らそうという意識ではなかったのです。むしろ逆に秋の方にクラスでガッと盛り上がるという所で、もう一度自分達の高校生としての「僕らは高校3年生であって受験生ではないんだ」というような意識を持っていけば、我々にとってもメリットがあるだろうということで分離案を出したということなんです。

それで生徒大会にもっていったのです。2つに分けて前も一週間、後ろも一週間合わせて2週間楽しくやれると風呂敷を広げれば、結果的には承認という形をとれたかもしれないけれど、あくまでも正攻法でいこうということで、趣旨説明をクラスごとにやりました。その結果は僅差で否決ということになったんです。その趣旨がどれだけ皆に分ってもらったのかというのはわからなかったのですが、2回記念祭について考える時期があったのは良かったなと思います。

高木　安藤さん、あなたは34代副会長、35代会長なのですが山本健司会長の頃の雰囲気とか言い伝えみたいなものを、語ってくれませんか。

安藤　山本さんの代の副会長に私の兄がいましたのでリアルタイムで情報が入ってきたのです。山本さんの代をモットーに執行に入りましたので、それを目指すというか、憧れというかそういう所があったのです。まず、そういう考え方を継承して児玉さんの代になりました。そしたら執行だけで考えても自治会全体は動かないということで、記念祭という大きな機会を生かして、生徒全体に考えてもらおうということでテーマをつくることになりました。そこで「生きる」というテーマを作ったんです。それで市民会館で原爆の写真展をやったのですが、これは戦争反対というものではなくて、ふわふわ浮わついている高校生活(僕らはそう思っていたのですが)に、喝を入れるというか、考える機会を与えようということでやったのです。テーマを元にクラス展示も強制展示みたいなことを始めました。

春秋分離案のことを話し合ったりしたんですが、とてもじゃないけどできないということで、春秋分離案はできないけれど、そのかわり考えようということで、それを継承したのが僕が会長になった代です。

高木　34代の「青春ー同世代の若者たち」というテーマと、「生きる」という児玉君の時のテーマと、何か関係がありましたか。前の代のテーマと精神が次の代に自分が今度中心になっておやりになる時の思いとではどうですか。

安藤　それは児玉さんの影響をもろにかぶりました。戦争というか原爆をテーマにとってしまったので、僕らと同じ年代の若者が戦争へ行っているということを考えざるを得なくなってしまったのです。それがすごく頭にあって次の代に「青春ー同世代の若者たちー」というのができたわけです。ですから、33回と34回の記念祭は僕の頭の中ではワンセットという気分でやっていました。

大仁　各代のテーマの関連について説明をします。

まず、「生きる」というテーマ決定の背景には、この頃芦高生が友達同士で話し合っている話題はアニメのこととか、漫画の雑誌のこととか、あるいは受験のことといった話ばかりであって、本当に高校生としてどう生きるのかなど根っ子の部分の所の話がなくて、浮わついた話が非常に多いということがありました。さらにこの年が丁度戦後35年、原爆が落ちて35年目に当たっているということ、児玉君自身

が精中時代に修学旅行で原爆展を見たということ、個人的なつながりで原爆資料館の館長さんと知り合いであったということなどがありました。この展示は、各新聞社が取材にきた程でした。
次の安藤君の代のテーマは、「生きる」が余りにもテーマが大きすぎたのでもう少し絞ろうということになって、「青春－同世代の若者たち－」となったのです。その時も戦争が意識の中にあって、同じ世代でありながらアフリカでは戦争してるじゃないかとか、ベトナムはどうなっているのかということがありました。
また、戦争から離れて、外国人で日本に来たカナディアンスクールの話なども出、「同世代の若者たち」ということで世代を絞ったわけです。
次の鈴木会長の時に、その「同世代」もまだ広すぎたということで、我々は芦高生なんだから芦高生ということにもっと絞り込もうということになり「私たちの芦高」となったのです。この3つのテーマの段階は全部「生きる」から絞り込んでいって3代続いたもので、芦高生が「生きる」というのはどういうことだろうかと考えていったわけです。

高木　永田さん、あなたは安藤会長の時の副会長ですね。副会長としてうまくいったこともあるだろうけれど、うまくいかなかったこともありましたね。裏方としての苦労話はないですか？例えば、テーマと自治会員があまりにもかけ離れているとかそんな苦労話はないですか。

永田　このテーマをクラスで発表した時点で「なに臭いこと言ってんねん」という反感が多かったですね。実際、前の代の児玉さんとか安藤さんからいろんな話を聞いていたから、分かったつもりになっていただけかもしれないけれど、クラスとのギャップが激しかったというか、執行以外の他の人たちともギャップが大きかったですね。

金延　34回目の記念祭からこの学校に赴任してきたと思うのですが、32回以前はテーマは無かったんですか。

山本健　簡単な校訓と同じような〝自由、自治、創造〟みたいなテーマを掲げたんですが、それは単なるスローガンで内容には生かされてなかったですね。

安藤　そういう歴史があったので、児玉さんがぶち壊そうかというのでテーマを創ったんです。

金延　安藤会長の頃に自治会展示はクラス展示で、テーマの半強制が始まったのですか。

安藤　強制展示は、児玉さんの頃です。

金延　児玉会長以前にはテーマに沿ったクラスの強制展示というのはなかったのかな。

山本健　全くなかったですね。

金延　今は伝統的にテーマに沿ったクラス展示が建て前上は続いているんですが、永田副会長が言ったように、執行部と一般生徒との動きがかけ離れている。そのギャップは34代の頃にもあった。僕は知らなかったので最初はこう思っていたんです。昔はクラス展示がそのテーマに沿ってうまく行われていた、その力量が芦高の記念祭にはあった。その伝統がずっと続いていたんだけれど、年々力量不足が表面化してきた。昔はできたけれど今はできないんだと理解していたんです。でも、そうじゃなくてスタートの時点からしんどかったということですね。

安藤　そうですね。

高木　「生きる」の時の戦争展関係は結構良いのが最初から出てきましたね。

高木　今、大仁先生や当時の会長さんの話を総合しますと、昭和56年の「生きる」から始まって、少しテーマが大きすぎたということで58年の「私たちの芦高」まで来たわけです。伊塚さん、あなたは昭和59年の記念祭に副会長として加わったわけですが、「WE CAN－無限の可能性への挑戦－」というテーマのいきさつはどうですか。

伊塚　児玉さんの代の「生きる」というテーマが成功し、マスコミにも騒がれたことを先生方から聞いてプレッシャーだったんです。次の安藤会長の時も重いタイトルで、「私たちの芦高」もシリーズだというのを聞いてびっくりしたんです。
「私たちの芦高」というテーマの記念祭は、私たちが執行部でない時の目から見て、ただのお祭の記念祭に戻りつつあったんです。次の私達の代で、意志が受け継がれてなくてお祭りに戻っているというプレッシャーでどうしょうかと考えたあげく、一つの

逃げ道なのかもしれませんけれど、執行部がタイトルを考えるからダメなんだ、クラスの皆にアンケートをとろうということで、全校生から募集したんです。

「WE CAN」はある生徒の案で、「無限の可能性への挑戦」はこっちが勝手にサブタイトルをつけたんです。とにかくもっと枠を広げて、親しみやすいテーマにしよう、クラスとの溝を埋めようというのでこうなってしまったのです。結果から言うと、やはりお祭で終わってしまったというのは大きな反省点だと思います。

高木　この36回記念祭の記念講演会の講師はどなたでしたかね。

伊塚　国立民族博物館の福井先生です。

高木　テーマが「思考の多様性を求めて」でしたが、これについて何か記憶に残ってますか。

伊塚　私が担当だったんですが、内容がちょっと堅かったというか、難しかったし、専門的になりすぎたんですね。ただ、先生自身のオーソリティーがすごかったので、すごい先生を呼んだという自己満足はあったんですけど、芦高生には浸透しなかったのではないでしょうか。

高木　それぞれ自分の代の講演会がこうだったという思い出がありましたら。宮尾さんいかがですか。

宮尾　私の代の記念講演会は、できる限り芦高生であった方を選ぼうという方向で進んでいたのですね。芦高を卒業された方なら記念祭の趣旨も理解して話していただけるんじゃないかと思っていたんですけど、どうしても今までされた方と重複したりするので、ちがう方向にも向いてみようということになりました。そこで京都の伏見工業ラグビー部の山口良治先生に、芦高もラグビー部が強い方向に向っていたものですから、おいでいただこうということになりました。ラグビーの青春という方面から話していただけまして、良かったんじゃないかなと思うんです。生徒の方からも共感したという声も多く聞かれました。

高木　そういう意味では非常に講演会が成功したということですね。

宮尾　そうですね。講演会はあまり好きじゃなかったんですけど、好きになりました。(笑)

高木　他の代ではいかがですか。自分の代の講演会の思い出あるいは生徒の反応が良かったなど。山本光一君、今年はどうだったんですかね。

山本　僕は記念祭を2回しましたが、2年の時の講師の先生には福井達雨先生。滋賀県で知恵遅れの方の学校で理事兼校長をされている方に苦労話とか、それに関係して自分の息子さんに対する接し方とかについて話していただきました。その時は講師の先生が決まらなくて、2・3あたってみても僕らが思っているよりも大人のスケジュールは簡単ではなかったのですが、タイミングよく福井達雨先生に快く引き受けてもらいました。この講演会は、まずまず成功したと思います。

41回の初めての6月の記念祭の講師に建先生にお願いしました。理由は、僕らも芦高のOBの方にお願いしようという伝統が残っていました。記念祭が6月になって新しくなるということで、古いものをもう一回見直そうと思ったわけです。建先生ならば芦高のことはよくわかって下さっているだろうということで建先生をお招きしました。昔の記念祭とか授業とかについて今との違いを話していただきました。生徒のウケの方は賛否両論という感じでしたね。話の内容はテーマに沿った良い話が聞けたのではないかと思います。

60年代初めの記念祭

高木　それではですね、60年代から今年の平成元年までの各代の会長さんや他の方もお見えですから、順を追って全体的なお話しをうかがうとして、そのあと行事ごとにもう一回振り返ってみましょう。それでは山下さん、昭和60年代初の記念祭について語ってもらいましょう。

山下龍　僕らの年は会長自らごたごたがあって、全体的にはまとまりのない執行部でした。記念祭はテーマと中身が全然違っていたような気がします。それで、内容的には今までのことを継承してきただけに終わったと思います。

高木　テーマとのギャップの話ですが、山下雪絵